

メディアセンターのWebサイト統合

もとい えり こ
本井英理子

(三田メディアセンター)

ほ さか むつみ
保坂 睦

(三田メディアセンター課長)

慶應義塾大学メディアセンターのWebサイトは、これまで各キャンパスのメディアセンターが独自に作成・管理していたが、2020年3月にこれらを統合し、全キャンパス共通のWebサイト¹⁾を公開した。本稿では、Webサイトを統合するに至った経緯や新Webサイトの概要を述べ、課題や今後の展望について触れたい。

1 背景

慶應義塾大学は6キャンパスに、2つの図書室を含む6つのメディアセンターおよびメディアセンター本部を有する。これらのメディアセンターは、それぞれ独自のWebサイトを構築し、各館の利用者に向けて情報を発信してきた(本誌カラー口絵の4ページ目を参照)。しかし、メディアセンターの情報が各Webサイトに散在していたため、利用者は最初に利用する先のメディアセンターを選んでそれぞれにアクセスしなければならなかった。そこで、2008年8月に、学習・研究に必要なサービスへのワンストップアクセスを提供するためのWebサイト(通称「メディアセンター・ポータルサイト」²⁾、以下「ポータルサイト」とする)が立ち上げられた。ここには全キャンパス共通の情報やサービス、メディアセンター全体としての活動紹介に加え、各メディアセンターの情報もリンクとともに掲載された。これにより、主要なサービスや共通するお知らせなどの情報はポータルサイトにまとめられたが、サービスの詳細や各メディアセンター独自のコンテンツ・お知らせなどは依然としてそれぞれのWebサイトに掲載されていたため、結局のところ完全なワンストップアクセスを提供することはできなかった。複数キャンパスを利用する利用者一例えば進級すると所属キャンパスが変わる学部生や、複数キャンパスで教鞭を取る教員など一にとっては、デザインや構

成の異なる複数のWebサイトを使わなければならない状況に変わりなかった。

一方で、メディアセンターのサービスは、全キャンパスでの共通化・平準化が少しずつ進展していた。電子ジャーナルやデータベースにアクセスするための入口は統合され、ILLサービス、紹介状発行、オンラインレファレンス、問い合わせ等の各種フォームは統一化が進み、サービスの内容や対象者も、キャンパスごとに多少の差異を含みながらも平準化が進んだ。また、各種サービスのヘルプやパスファインダー、ガイド類は「LibGuides」³⁾を利用したものが増え、全メディアセンターで共通化されたフォーマットで提供するようになっていった。

2 共通サイトの構築

こうした背景のなか、2017年夏に三田・信濃町・理工学メディアセンターが使用していたコンテンツマネジメントシステム(以下「CMS」とする)のライセンスが2019年8月に終了することが決まり、3つのメディアセンターが同時にWebサイトを再構築する必要性に迫られた。その時点でメディアセンター内にはWebサイトのあり方全体を議論する場が存在していなかったが、これを機として全塾レファレンス担当者会議での議論が開始され、全メディアセンターで統一したWebサイト(以下「共通サイト」とする)を構築する提案を、2018年3月にメディアセンター事務長会議へ提出した。その結果、2020年度までに全メディアセンターのWebサイトを共通サイトへ切り替えることが決定された。当初は2018年度内での切り替えを検討したが、2018~2019年度前半は図書館新システムへの切り替えと重なり業務負荷の増大が見込まれたため、CMSライセンスの契約を延長して対応することとなった。

事務長会議での決定を受け、まずは全塾レフェレ

ンス担当者会議にて共通サイトのコンセプトと構成案を練った。検討するにあたっては、University of Washington Librariesや九州大学附属図書館のWebサイトなども参考にさせていただいた。共通サイトでは、それまで独自に構築してきた各Webサイトを統合し、いわば慶應義塾大学メディアセンターの「顔」となる1つのサイトを構築することに加え、一部サービスや施設情報など、各メディアセンター固有の情報を載せる場所として専用のディレクトリを設け、共通化できない情報を掲載することとした。こうした構成にすることで、全メディアセンターの情報を1つのWebサイト上に集約し、利用者が「どのメディアセンターを使うのか」を先に決めなくても、情報にアクセスできるようになる。サイトデザインの統一によるユーザビリティ向上や、サイトの開発・維持管理コスト削減に繋がる点もメリットの一つだ。その反面、統合することにより、キャンパスごとの専門分野や特性に応じたレイアウト構成やコンテンツの掲載が制限され、独自性が失われてしまうことが懸念された。

コンセプトと構成を固めた後は、共通サイト構築のための実働部隊として、各メディアセンターのレファレンス担当メンバーで構成された作業チームを結成し、Webサイト開発業者の選定や移行すべきコンテンツの整理を進めた。2019年7月には、選定されたWebサイト開発業者とチームメンバーによるキックオフミーティングを行った。その後、仕様の策定、原稿の作成、動作確認と調整を経て、2020年3月27日、共通サイトは正式な公開に至った。

3 共通サイトの構成

共通サイトを管理するためのCMSには、慶應義塾全体で契約・管理しているMovable Typeを採用した。また構築用の領域としては、慶應義塾インフォメーションテクノロジーセンター（ITC）が管理するWeb公開用領域を利用した。共通サイトの構成は、大きく2つのディレクトリに分かれている。すなわち全メディアセンター共通の情報を掲載するディレクトリ（以下「共通ディレクトリ」とする）と、各メディアセンター個別の情報を掲載するディレクトリ（以下「地区ディレクトリ」とする）である。

共通サイトのトップページ（図1）には、蔵書検索とディスカバリ機能を備えたKOSMOS検索窓、

全メディアセンターの開館カレンダー、そしてお知らせをメインコンテンツとして配置した。全ページの画面右上に表示されている3つのタブ（「学内の図書館」、「調べる・探す」、「申し込む」）は、最もよく使うコンテンツへのショートカットとして配置されている。共通ディレクトリには、全メディアセンター共通の身分別利用案内、各種サービスに関する案内、各種ツールやパスファインダー類へのリンク、メディアセンター所蔵コレクションに関する情報、メディアセンター組織概要などが掲載されている。



図1 共通サイトのトップページ
<https://www.lib.keio.ac.jp/>

地区ディレクトリには各メディアセンターの新书推荐リストや利用案内、施設案内、フロアマップ、交通アクセス情報など、各メディアセンターに関する情報が掲載されている。利用案内など共通ディレクトリと内容が重なるものは、共通ディレクトリ内にリンクを張るなどして、可能な限り重複を避けた。メニューはメディアセンターごとにカスタマイズが可能なので、コンテンツの重要性に応じて並べ替えて表示したり、独自メニューを加えたりしている場合がある。また、各地区ディレクトリのトップページには、KOSMOS検索窓やお知らせなどのほか、ピックアップコンテンツという項目を設けている。ここはリンク付きの画像を配置できるようになっており、よく使われるデータベースやツールへのリンクを配置したり、イベントやお知らせを掲載したりと、メディアセンターごとに自由に利用している。このように、各地区ディレクトリのレイアウトはほぼ共通であっても、個々のパーツに一定の自由度を持たせることにより、当初懸念していた各所属キャンパスの特性や利用者に応じたコンテンツやレイアウトのカスタマイズにもある程度対応できるようにした。

4 統合による効果

共通サイトの立ち上げによる利用面での効果としては、全メディアセンターの情報が1つのサイト上で得られるようになり、全体像や活動の様子が見えやすくなったことが挙げられる。特にメディアセンターの組織やサービス体制を把握していない新入生や外部者などにとっては、利用しやすくなったのではないだろうか。さらに、サイトデザインが統一されたことで、特に複数のメディアセンターを利用する学生や教職員にとってのユーザビリティやアクセシビリティが向上した。デザインの統一は、メディアセンター全体としてのブランディングにも繋がると考えている。また、各メディアセンターのWebサイトの内容をすり合わせ共通ディレクトリの原稿を作成していく過程で、同一サービスであるにも関わらず名称や申込方法が異なるものがあることが分かり、調整・統一作業を行うこともあった。Webサイト統合前は気づかなかったサービスの相違を発見し、利用者が迷わないよう整備できたことも、統合による効果の一つであったと考えられる。

管理面では、各メディアセンターが別々に同じような情報を管理していた頃に比べ、共通する情報の管理が一か所で済み、省力化に繋がったことが最も大きなメリットと言えるだろう。さらに、CMSやWeb公開用の領域を一本化したことにより、将来的にも維持コストの削減が見込める。

5 統合による課題

利用面での課題としては、キャンパスや学部の独自性に応じたカスタマイズが以前よりも実施しにくいという点が挙げられる。共通ディレクトリはあらゆる利用者をターゲットとしているため、各メディアセンター独自のサービスを目立つ位置に配置したり、各キャンパスの利用者に特化した案内を掲載したりといった調整が難しい。こうした事情から、三田以外のメディアセンターでは、地区ディレクトリのトップページをカスタマイズし、サービスの起点として利用者に案内している。「どのメディアセンターを使う場合でも、共通ディレクトリのトップページから迷うことなく情報やサービスにアクセスできる」というのがWebサイト統合の狙いだったが、地区ディレクトリだけに情報が偏り、そちらを見なければ情報が得られないことが増えると、情報

が分断されてしまう。そうなるとう以前のように、利用者が複数のページをチェックしなければならない状態に逆戻りする可能性がある。目の前にいる利用者の研究分野や特性に応じたきめ細やかな情報提供を行うことと、メディアセンター全体をとらえたときの利便性とをいかに両立させ、あるいはバランスを取り、落としどころを見出していくかが今後の課題となるだろう。

構造・管理面の課題としては、Webサイト全体の管理がしにくい点が挙げられる。共通サイトは1つのサイトのように見えるが、実は裏側には共通ディレクトリおよび6つのメディアセンターと2つの図書室のディレクトリ、さらにはそれぞれの英語サイトを管理するため、計18個ものCMSが立ち上がっており、別々に管理されている。そのため、全体に関わる修正をする場合は全てのCMSに反映させなければならず、微細な修正であっても大掛かりな作業となってしまう。また、CMS間でコンテンツが共有できず、お知らせ・イベント情報もCMSごとに別管理となっているため、共通の内容を全地区ディレクトリのお知らせ欄に掲載したい場合も、それぞれのCMSに対して作業しなければならない。頻繁に更新が生じるお知らせ・イベント情報をこの方法で管理し続けるのは煩雑なので、対応策を検討しているところである。次期Webサイトを構築する時は、見た目だけでなく管理のしやすさも考慮しながら、CMSの構成を再検討できるとよいだろう。

利用面・管理面の課題のいずれも、統合後のサイトの使われ方のイメージ、ひいてはコンセプトそのものの認識に、Webサイト開発業者との間、さらにはチームの担当者間でも僅かにブレがあり、十分に共有しきれていなかったことが原因の一つだったと感じている。次期Webサイト構築を検討する際は、目指すべき方向性を事前にしっかり共有したうえで進めていけることが望ましい。

また、共通サイトが動き出した今、これからの維持管理も全メディアセンターが協力しながら進めていくこととなる。レイアウト変更や改修、不具合対応などを行う際は、常に全メディアセンター間での情報共有や合意形成が必要となり、全体的な作業量やコストの削減に繋がっているとはいえ、調整にかかる労力は以前よりも増大している。今後の維持体制をいかに保つかも課題の一つだと捉えている。

6 今後に向けて

これまでメディアセンターごとに分かれていたWebサイトを1つに統合する作業は、痛みを伴う大きなチャレンジであった。それぞれのメディアセンターが抱える利用者の利便性も考慮しつつ統合に取り組むためには、担当者間の密な意見交換や調整が必要であり、構築期間中には思わぬ制約や難題に何度もぶつかったが、そのたびに全員で悩みながらも何とか完遂することができた。各メディアセンターの代表としてこの難問と一緒に挑戦してくれた作業チームのメンバーや本部システム担当には大変感謝している。

今回の共通サイト構築は、統合という第一歩を踏み出したばかりで、いまだ過渡期にあるものだと考えている。前述の通りまだ課題も多く、使いにくい部分が多々あることは承知しているが、今回のチャレンジを経て得たものや学んだ点も多い。Webサイトの形の正解は1つではなく、時代によっても変わっていくものであろう。今回は「統合」をコンセプトの中心に据えて構築プロジェクトを進めたが、それが正解だったかどうかは正直なところまだ分からない。ただ、使い続けていく中で、今後目指すべき新たなWebサイトの形が徐々に見えてくることを期待している。すべてのメディアセンターが同じWebサイトを使うという初めての経験を共有し、それを踏まえて次のビジョンを描けることこそが、次期のWebサイトを構築する際に大きな意味を持つことになるのではないかと考えている。

参考文献

- 1) 慶應義塾大学メディアセンター.
<https://www.lib.keio.ac.jp/>, (参照 2020-07-07).
- 2) 木下和彦. メディアセンター・ポータルサイトの構築.
MediaNet. 2009, No.16, p.60-61.
- 3) 佐藤康之, 岡本聖, 三谷三恵子, 関恭子. LibGuidesの導入と活用—全塾レファレンス担当者会議の取り組み—.
MediaNet. 2015, No.22, p.38-44.